

ぱれっと

2011
4月
No.140

まだ*これ 合併号

●目次

- P 2～3 いち早く活動をはじめたNPO
- P 4・・・ 復興支援活動でサポセンを利用した団体

がんばろう！仙台

東日本大震災 特別号 I

東日本大震災により被災されたみなさまに心よりお見舞い申し上げます。
また、亡くなられた方のご遺族のみなさまに心よりお悔やみを申し上げます。

仙台市市民活動サポートセンターは、平成23年3月28日（月）から9月30日（金）まで、市民活動団体、NPO・NGO等の復興支援活動のサポート拠点として運営を行うため、一般の貸室利用や講座等の事業及びシニア活動支援センター事業は休止いたします。上記の期間、「ぱれっと」および「まだ*これ」は合併号として毎月1回発行いたします。

■ご利用案内■

H23年3月28日～9月30日

<開館時間> 午前9時～午後6時



▲3/12からサポセンでは、仙台市の地震に関する行政情報の発信を行いました。

■主な事業内容

- 復興支援活動に関する会議・打合せの場の提供
貸室：研修室1、研修室2、研修室3、研修室4、研修室5、セミナーホール（すべて無料）
交流サロン：3F、5F、セミナーホール
※利用申込みがない場合のみ（すべて無料）
その他：印刷機（有料）、コピー機（有料）、1F利用者パソコン（無料）の貸し出し、5F無料LANコーナー（パソコン要持込）
- 復興支援に関する情報の収集・提供
通常の情報支援に加え、復興支援活動にかかわるチラシ等を1Fにて配架します。
- 復興支援活動に関する相談の受付
- 今までご利用のみなさまへ
事務用ブース、ロッカー、レターケース、1階情報サロン機能、印刷作業室、パソコン等は今まで通りご利用いただけます。詳しくはお問い合わせください。

～東日本大震災 その時～ いち早く活動をはじめたNPO

3月11日、午後2時46分、仙台市内はもとより、東日本が大きく揺れました。さらにその直後、太平洋沿岸を襲った大津波は一瞬にして建物はおろか車も人もすべてを飲み込み、押し流しました。東日本大震災、それは、私たちのこれまでの想像を絶する甚大な被害を及ぼすものとなったのでした。震災直後、被災地のニーズに迅速に応え動き始めたNPOの活動をご紹介します。

活動拠点から温かい食事を！炊き出し支援

NPO法人仙台夜まわりグループ
NPO法人ワンファミリー仙台

まずは、食べること。震災直後から、市内のNPOが炊き出しを開始。ホームレス支援を行っているNPO法人「仙台夜まわりグループ」は、14日から、被災者のために炊き出しを始めました。市内青葉区で約500食分ほどの温かいカレーや豚汁、ご飯などが振る舞われました。

その他、同じく路上生活者の自立支援活動を行うNPO法人「ワンファミリー仙台」も、青葉区で近隣住民を対象に炊き出しを行いました。

その活動は、3月末まで続けられ、仙台市内ではまだ都市ガスなどのライフラインが復旧せず、食糧なども不足していたときでしたので、被災者はもちろん自宅に避難している市民にとっても心強い支援となりました。

▲NPO法人仙台夜まわりグループの炊き出しの様子



必要なところに必要なものを！物資を運ぶ

NPO法人ふうどばんく東北AGAIN
セカンドハーベスト・ジャパン
NPO法人ワンファミリー仙台

ライフラインが遮断され、生命を保つ最低限の物資が思うように届かない事態となった時、即座に動きだしたNPOがありました。

NPO法人「ふうどばんく東北AGAIN（あがいん）」では、東京に事務所を持つ「セカンドハーベスト・ジャパン」に呼びかけ、全国のネットワークを駆使し物資を集めました。車両の手配が付き「緊急車両証」を取得したのが震災から3日後の14日。

これで、東京～仙台間の輸送ルートが確保されました。仙台の物資保管拠点は、NPO法人「ワンファミリー仙台」で運営していた絆空間サロン・ド・アンファミーユ。日々ここに集う近隣の市民が仕分け作業を手伝ってくれました。活動に関わる人数は日を追うごとに増えていったといいます。

運搬は避難所に飛び込みで訪問するローラー作戦

に打って出ました。震災直後5日間で訪れた避難所は市内だけでも10箇所をゆうに超えました。

物資は、初めは必要とされるものを予測して持って行き、その際ニーズを訊いて回ったといいます。例えば、ろうそくが今夜分しかないという場所には、次の日に物を調達して届けたのです。

日頃より培ってきた市内のNPO同士のつながり、さらには全国ネットワークを通しての支援。今回はNPOの持つ機動力がフルに発揮されました。震災をきっかけに、人と人がつながって生きることが本来の地域社会の姿だと気づいたといいます。日頃の活動の中での支援する人、支援される人に関係なく市民が一丸となって支援物資を運び、命をつないでいった活動でした。

全国と被災地をつないで支えるNPO

被災者とNPOをつないで支える合同プロジェクト

全国の市民活動・NPOのネットワークを駆使して、被災地の支援を行う団体も数多く被災地に入りました。

インフラの復旧も進まない中、いち早く被災地に入って支援の拠点づくりを進めた団体や、被害の少なかった地域に拠点を設置し、そこから被災地にボランティアを派遣する団体など、阪神・淡路大震災などの経験を基に、積極的な活動が見られました。

被災地のこれからを見据えたとき、個々の団体の支援だけでなく、団体間のネットワークによる支援

も必要とされることから、在仙のNPOが主体となって「被災者をNPOとつないで支える合同プロジェクト（略称：つなプロ）」を立ち上げました。

その名のとおり、NPO間のネットワークを駆使し、避難所生活を総合的に支える「広く大きな」支援のほか、特別なニーズを持つ社会的弱者への「ピンポイント」な専門的支援を中心に、専門性を有するNPOと共に連携しながら支援を行う、被災者のこれからの生活を支えようというプロジェクトです。

市民活動サポートセンターが、復興支援活動の拠

点として運営を開始した3月28日の翌日には、早速当センターを会場として全国各地からの多くのボランティアの参加をうけ、このプロジェクトのミーティングが開催されました。ミーティング終了後には、複数のチームに分かれ、県内各地の避難所の状況把握とニーズ調査に出発していきました。

この調査結果を基に、これから専門性を有するNPOが支援を必要とする人たちの元へ派遣されていきます。避難生活が長引く事も視野に入れ、地元だからできる長期的なサポートを行っていく準備も、着々と進められています。



▲つなプロのボランティア説明会の様子

シニア活動支援センターをご利用のみなさんも、復興に向けて準備を始めていらっしゃいます。まずは市内各地にいる会員や利用者の安否確認から。みなさんの無事を喜び合い次の活動の活力に変え、復興の一步を踏み出した団体をご紹介します。

■「再開を待っています」の言葉を胸に

プラチナ☆クラブ
代表 今野江衣子さん

地震発生時、今野さんは、ちょうど「まだ*これ第23号」の取材のため来館されていました。椅子に座っていることもできないほどの大きな横揺れの恐怖を、いっしょに体験しました。揺れがおさまった後、今野さんはすぐに自宅に戻りましたが、仙台市宮城野区蒲生にあるお住まいが津波の被害を受け、半壊状態となりました。また、自家用車も流され、パソコンも家の中にあつたので、移動・通信手段も絶たれてしまったそうです。

しばらく娘さんの家に身を寄せていた間、これから活動を続けられるかどうか悩んだといいます。しかし、その後参加者のみなさんにメール等で連絡すると、「いつまでも再開を待っています」というメッセージが続々届いたのだとか。幸い、参加者の住所録や書類は無事で、メンバーからの力強い激励もあったことから、心の葛藤はあったものの「やっぱり続けなきゃ」と前に進む決意をされたそうです。

しかし、今まで使用していた市民活動サポートセンターが使用できないため、今後は民間ビルの貸室やカラオケルームなど、他の場所も開拓していかなければと考えているそうです。最初は、参加者の方と今回の震災に関することや何か困っていることを話し合う、といった時間をもちたいと今野さん。「ひとり幸せになれば、ひとり寂しい人が減る」そう言って、今野さんは今までどおりの明るい笑顔を見せてくださいました。(真壁)



※「まだ*これ第23号」に掲載予定だった今野さんの記事は、シニア活動支援センターが再開した際にあらためて掲載させていただきます。

▲4/4今野さんとシニアセンタースタッフ

■笑学校の生徒にお見舞いと予定変更のお便りを出した

シニア元気笑学校
校長 渡辺源治さん

地震から数日後、シニア元気笑学校の校長渡辺源治さんが、いつものように自転車に乗って市民活動サポートセンターをたずねてくださいました。街の中にはまだ、不安気な顔をした帰宅難民や、リュックを背負った買出しの人がたくさん歩いていました。「まるで戦後みたいだなあ」と言った渡辺さんの言葉で、地震が仙台の街に及ぼした影響の大きさを実感しました。またその時、サポセンはじめ公共施設が使用できないため、民間のビルの貸室を借りてスタッフと打合せをする事になったと、うかがいました。

その約2週間後にまたご連絡すると、シニア元気笑学校として、生徒さんにお見舞いと予定変更のお知らせのお便りを出した、というお話をお聞きました。計202通出したという封筒の中には、何かに役立ててほしいとハガキも一枚同封されたといいます。ちなみにこの202通は、郵便局に投函しに行った際に「災害用郵便」として取り扱ってくれることがわかり、その制度を活用できたそうです。

その後、生徒さんからは電話やハガキで、御礼や近況の知らせが届き始めているそうです。中には、それぞれの住む地域で支援活動を行っているという報告や、同封したハガキを、通信手段を絶たれた避難中の学生にあげてたいへん喜ばれた、といった嬉しい報告もあったそうです。

今回の震災により、シニア元気笑学校が4月からスタートする予定だった「サロン絆」も順延を余儀なくされました。でも、今まで培ってこられた生徒さんとの「絆」が、これからの街の復興にきっと明るい力を与えてくださるだろうと信じています。(真壁)

復興支援活動で サポセンを利用した団体

(3月28日～4月3日)

東日本大震災をうけ、復興支援活動に取り組むNPO・市民活動団体がサポセンをご利用いただく際は、事前に「復興支援活動団体利用受付シート」の提出をお願いしています。

このシートは、サポセン1階に掲示し、ブログにも受付順に掲載します。団体活動の詳細はそちらをご覧ください。

また、今後これらのNPO・市民活動団体の活動については、「サポセン復興支援かわら版」(仮称)、当センターブログなどにて紹介します。ぜひ、ご覧ください。

なお、サポセンでは復興支援活動に関するさまざまな相談にも対応いたしますので、窓口スタッフまでお声がけください。

■復興支援活動情報ブログ

<http://blog.canpan.info/fukkou/>



- NO.1 「語り手たちの会・みやぎ」
被災地の小さな子ども、大人に向けたおはなし会
- NO.2 「被災者をNPOとつないで支える合同プロジェクト」
特別なニーズを持つ少数被害者への専門的支援
- NO.3 「NPO法人仙台交流分析協会」
被災された方々の心のケア
- NO.4 「カウンセリングスペースこころの杜」
メンタルカウンセリングの実施とカウンセラー派遣
- NO.5 「宮城三女OG合唱団」
復興支援チャリティコンサート、避難所訪問演奏
- NO.6 「NPO法人国際ボランティアセンター山形」
(東北広域震災NGOセンター)
被災地のニーズ調査、物資支援、炊き出し支援
- NO.7 「NPO法人20世紀アーカイブ仙台」
避難所での「クラシカル・センダイ」上映会の実施
- NO.8 「仙台ITビジネス研究会」
PC・通信環境、HP運営に関する復興支援

- NO.9 「宮城県マンション管理士会」
被災マンションの無料相談会の実施
- NO.10 「宮城県手話通訳問題研究会(伊達班)」
聴覚障害者の状況確認のための戸別訪問
- NO.11 「NPO法人ほつぷの森」
チャリティコンサートの実施と復興物資支援
- NO.12 「アート・インクルージョン実行委員会」
復興支援チャリティコンサートの実施
- NO.13 「一般社団法人パーソナルサポートセンター」
被災地への救護・復興物資の輸送、心のケア
- NO.14 「被災地障がい者センターみやぎ」
障がい者への物資、支援金、人員の提供等
- NO.15 「社団福祉法人仙台的のちの電話」
震災後の自殺、孤独死の防止活動
- NO.16 「NPO法人スペシャルオリンピクス日本・宮城」
知的発達障害者の震災後の心のケア支援
- NO.17 「みやぎ連携復興センター」
人的・知的資源の提供、資金助成、物品の仲介

■案内図

[最寄のバス停]
電力ビル前
商工会議所前

[地下鉄]
広瀬通駅下車、
西5番出口すぐ



■編集後記

◆地震当日、館内にいらした利用者のみなさんを全員安全に誘導できホッとしています。またスタッフも無事でした。その後報道される信じがたい被害の状況に日々心を痛めておりますが、今こそ、スタッフが一丸となって、市民活動団体の復興支援活動をサポートしていきます！(スタッフ一同)

発行: 仙台市市民活動サポートセンター

〒980-0811 仙台市青葉区一番町四丁目1-3

TEL:022-212-3010 FAX:022-268-4042

ホームページ <http://www.sapo-sen.jp>

発行日: 2011年4月11日

編集: 特定非営利活動法人 せんだい・みやぎNPOセンター

編集人: 小松州子 菅野祥子 太田貴 葛西淳子 真壁さおり

仙台市市民活動サポートセンターは、特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンターが仙台市の指定管理者として、管理運営を行なっています。[指定管理期間: 2010年4月1日～2015年3月31日]